

第2班講師渡辺前委員長への質問

平成29年9月10日

登山専門部渡辺前委員長に質問させていただきます。第一次報告書で指摘された内容については既に要望を出し今回説明いただいておりますので、それ以外のことで質問をさせていただきます。

私たちは、この雪崩事故がどうして起こってしまったのか、何が足りなかったのか、どうすれば回避することができたのかという根本的な疑問に対する回答を求め続けています。

検証委員会第一次報告書、国立防災科学技術研究所の現地説明会、生徒たちの証言などを基に、私たち自身が検討を重ね、いくつかの「確かなこと」にたどりつきました。そのことを基にして質問をさせていただきます。

すでに説明会の中で回答いただいた内容への質問もあるかと思いますが、事前に作るためにそのような重複もできます。質問は遺族等の切実な気持ちですので誠実なご回答をお願いします。

《私たちにとって確かなこと》

- 1 本件の講習会は、積雪期登山の正しいあり方と安全登山の知識・技術を習得し、登山事故防止を目的にしている。登山の事故防止を学ぶ講習会で、絶対に起こしてはならないのが死亡事故だ。しかし、訓練の場で雪崩事故に遭遇し、8名の尊い命が奪われた。この死亡事故の事実を、講習会の主催者である高体連は、真摯に、重く受け止めなければならない。そうしなければ8名は救われない。
- 2 雪崩に遭遇するかどうかは、人間がそこにいたかどうかだ。雪崩の発生原因の問題ではない。雪崩回避は、そこに入るかどうかの人間側の判断の問題だ。
1班から4班までが雪崩に遭遇した。回避ができなかった。1班は8名が存在と未来を一瞬にして奪われる、想像を絶する痛ましい結果になった。
当日あの現場に行くことを決めたのは指導者の判断だ。生徒ではない。雪崩回避ができなかったのは、指導した登山専門部役員と各班講師の状況理解と判断が間違っていたからだ。
- 3 危険を知らせる情報はたくさん出ていた。気象予報も、その日の気候も、地形的条件も、積雪量も、雪の状態も、視界も、これらの全てが、雪崩の危険を知らせる情報を指導者に送っていたが、正しく受け止めることができなかった。その結果雪崩を回避する機会を逃し、雪崩に巻き込まれてしまった。
- 4 様々な雪崩情報に接しても、正しく危険性を受け止められなかったのは、感性が鈍くなっていたからだ。感じ取れなかったから、安全だと盲信し、雪崩事故の現場に入っていった。
茶臼岳登山を中止したことで危険を回避できたと思い、基本的な安全確認や情報収集をしなかった。各班講師は、情報から雪崩の危険性を感じ取ることができなかった。感じ取れないから、漫然と安全だと信じ込み、雪崩の現場にキックステップで登ってしまった。

5 大雪注意報、雪崩注意報が発令されている中、ラッセル訓練を実施した指導者の判断は間違いだった。

あの日、平地でも寒く雪が降っていた。大雪や雪崩注意報が出ている中で、冬山装備も十分でない状態で、なぜ、普段使ったこともない危険ルートに登り、結果的には登山と同じような訓練を行ったのか。なぜ「止める」という考えが起こらなかったのか。万が一のことをどうして考えられなかったのかなど、指導者の認識と判断の甘さに強い憤りを感じる。

6 訓練時、各班講師は本部との連絡や講師間の連絡をしていない。相互チェックや助け合う関係がなかった。このことが危機判断を遅らせ、被害を大きくした。

7 ラッセル訓練に計画を変更し、雪崩の危険のある斜面に入ることを決めた指導者たちには日々の生活がある。指導者の言を信じた生徒の多くは若い命を散らした。何てことだ。どうしてこんなことになったのだ。

遺族は突然悲しみの底に落とされた。悲しみの底はかすかな明かりさえ届かない、出口のない谷底だ。当たり前前の日常を取り戻したくて、どこに向かっていけばまた息子に会えるか、暗い底でいつまでも考え続け、迷い続け、泣き続けている。

《第2班講師渡辺前委員長への質問》

1 雪崩の危険性の認識について、お聞きします。

(1) 講習会の活動場所（ゲレンデ・樹林帯・茶臼岳）における雪崩の危険性について、どのような考えをもって実施していたか。そうした考えの根拠になっているのはどのようなことか。

(2) 樹林帯での活動と雪崩に遭遇する危険性について、どのような認識をもっていたか。

(3) 樹林帯の先、天狗の鼻までの樹木のないところにおける雪崩の危険性について、どのような認識をもっていたか。

(4) 雪崩が起きる可能性については、何で判断をしていたか。

(5) 今回の積雪（証言や記録により違っているが）では、茶臼岳で雪崩がおきる可能性がどの程度あると感じていたか。

(6) 気象情報の収集について、渡辺前委員長はどのような考えをもっていたか。また、実際に、いつ、どこから、どのような気象に関する情報を得ていたか。

(7) 今回の気温の変化と積雪は、どのような場所で雪崩を引き起こすと思っていたか。

5/28の説明会の回答では、27日までの気温の変化と積雪により、雪崩を引き起こす可能性が増すことを知っていたと話している。20日以降の天候の変化と26日夜からの新雪であることや地形的条件等を考えるならば、雪崩の危険性が高くなることは山岳関係者なら誰もが予想できることである。具体的には、どのようなイメージ（どのような場所で雪崩が起きやすくなると）を持っていたのか。

(8) 大雪注意報、雪崩注意報については、いつ知ったのか。

5/28の説明会では、注意報が出ていることは知らなかったと回答している。例年にない大雪（19年ぶりとか）が降っていてその日が登山である。なぜその日の山の天気予報を入手しなかったのか。どうして大雪、雪崩注意報を入手できなかったのか。積雪でも樹林帯なら安全だと端から思っていたので収集しなかったのではないかと疑いたくなる。

もし天気予報を収集しないことが組織（登山専門部役員）で行われたとすると、この事故は起こるべくして起きた事故といってよい。そうした指導者の言葉を信じた生徒たちが余りにもかわいそうだ。

(9) 弱層テストを実施したのか。その結果どういう分析をしたのか。

弱層テストについて、指導者が全員集合した中で実施し評価することが必須であると思う。積雪期の安全登山ということからも、実践的研修にもなると考えている。

(10) 第2ゲレンデ奥以外に、雪崩発生危険性があると考えていたところがあるか。

事前調査、積雪量、地形的条件、天候の変化等を考えると雪崩が発生しやすくなることが予想できる。

(11) 第1次報告書の後の聞き取り調査で、「滑落だけは心配した。雪崩ということを心配した人は一人もいない。」と、検証委員会委員長は説明した。渡辺前委員長は、雪山登山を計画しているのに、滑落は心配したが雪崩は心配しなかったということか。

(12) 滑落を心配して茶臼岳登山を中止した。ラッセル訓練でも滑落を心配したということか。

(13) 5/28の説明会での質問で、27日まで気温の変化と積雪により、雪崩の可能性が増すことを知っている」と回答している。知っているのに雪崩ではなく滑落を心配したということか。

2 ラッセル訓練への計画変更の判断について、お聞きします。

(1) 27日の朝、前日からの降雪で雪が積もっていることは予想したか。

(2) 雪の状況、降雪量については、どのようにして調べたか。そのとき何を思ったか。

(3) 積雪量について、15cm位と回答したが、測定はしたか、どこで、どのように調べたか。

(4) 朝目覚めたとき、雪は降っていたか。風は吹いていたか。視界はどうだったか。茶臼岳の頂上は見えたか。

(5) 27日朝、天気予報で現場付近の情報を入手したか。入手しなかったとしたら、それはなぜか。

(6) 猪瀬委員長から電話が入る前、渡辺前委員長としては、雪の状況等から、27日の予定について、何かすでに決めていたことがあったのか。

(7) 猪瀬委員長から電話が入ったときに、菅又副委員長が電話に出て、渡辺前委員長はトイレからもどった後に話し合いをしている。猪瀬委員長からの電話には出なかったのか。

(8) 渡辺前委員長は誰と話し合ったのか。どこで、どのくらい、どのような話をしたのか。

(9) 菅又副委員長と協議し、登山中止やラッセル訓練を決めたと証言しているが、その話し合いには猪瀬委員長は入らなかったのか、それはなぜか。

(10) 3人で話し合っただけで決めたというのは、菅又副委員長と2人で先に話し合いをして結論を出し、猪瀬委員長に連絡し、その旨を伝えて、合意を得たということか。

- (11) 登山中止は誰の提案か。3人とも同意見であったのか。
- (12) 登山中止の最も大きな理由は何か。
- (13) 登山中止の話のときに、大雪注意報、雪崩注意報の話がでたか。
- (14) 登山中止の後に、どのような選択肢がでたか。ラッセル以外に何か出たか。
- (15) 3名の会話の中でラッセル訓練という言葉が使われたか。誰がどのような言い方で最初に提案したのか。
- (16) ラッセル訓練の話が出たとき、樹林帯は活動の場所として想定されていたのか。樹林帯という言葉有谁かが使ったか。
- (17) ラッセル訓練の話が出たとき、樹林帯を抜けたところも想定されていたのか。樹林帯の先の雪面についての表現が会話の中で出てきたか。
- (18) ラッセル訓練の場として樹林帯とその先についても、3名とも想定して話をしていたか。
- (19) 渡辺前委員長の証言の中に、ラッセル訓練の場として「グレンデの安全な場所」という言い方があるが、「グレンデの安全な場所」という言葉は3人の話の中ででてきたか。
- (20) 「グレンデの安全な場所」という言葉は、27日朝の講師打ち合わせの場面で説明として使っていたか。
- (21) 「グレンデの安全な場所」は講師全体に周知されたか。
- (22) 「グレンデの安全な場所」には、樹林帯もはいるのか。
- (23) 「グレンデの安全な場所」には、樹林帯の先もはいるのか。
- (24) ラッセルとは、どのような行為か。それは、どのようなときに行うのか。
- (25) ラッセル訓練は何のために行うのか。
- (26) ラッセル訓練を2回行うのは高校生にとってどのような意味をもつのか。
本件講習会では結果的に26日と27日に、2回も実施することになった。
- (27) ラッセル訓練への変更は、登山ルートの変更となることを意識していたか。

3 安全であると判断した根拠を述べていますが、そのことについて、お聞きします。

(1) 風が弱いことは安全であるというのは、具体的にどういうことか。

ラッセル訓練においても風の強さが安全に関係するのか。平地での訓練ではなく、樹林帯の尾根をラッセルで登ることを想定していたので、風の強弱が危険性につながったのではないか。実際に渡辺前委員長は樹林帯が終わるところで風が強くなってきたと感じ、第2班に下山を指示している。

(2) ここでいう安全とは、どのようなことに対して安全であると考えているのか。雪崩も当然入っているのか。

(3) 安全と判断した根拠として積雪が15cm程度をあげている。積雪15cm程度であることが安全とは、具体的にどのようなことなのか。

ラッセル訓練をする上で15cm程度なら安全なのか。何cmならば危険になるのか。多分平地でのことではなくて樹林帯を想定していたので、樹林帯を登っていく上で15cm程度ならば危険はないという意味なのか。

(4) グレンデ横の樹林帯の尾根ならば雪崩の危険性はないと考えたと証言している。樹林帯の尾根ならばどうして危険性がないのか。

この証言は、ラッセル訓練で当初から樹林帯の尾根を登ることを決めていたことを表している。ラッセル訓練に変更したときから、樹林帯の尾根を登ることを想定していたのであれば、風がなければ第1班と同じように樹林帯の上まで登ることも考えていたということか。

(5) 登山中止を決め、ラッセル訓練への変更を決めた時に、既に樹林帯尾根を登ることも想定していたことになる。そう考えてよいか。

渡辺前委員長が安全と判断した根拠は上述の3点（風がない、積雪が15cm位、樹林帯の尾根）である。3点ともに平地でのラッセル訓練ではなく、樹林帯の尾根を登っていくことを想定した根拠である。

(6) 安全と考えた根拠の中に、なぜ天気予報、気象情報が入ってこないのか。

気象情報を入手していなかったためか。気象予報は安全を示すものではなかったということか。あるいは朝の2時間程度なので雪崩の起きる確立は低いと考えたからなのか。

4 実技講師打ち合わせについて、お聞きします。

(1) 3名が実技講師打ち合わせで発言をしているが、それぞれどのような内容の発言をしたのか。

(2) 第2グレンデ奥は雪崩の危険があるので立ち入らないという指摘は誰がしたのか。

(3) ラッセル訓練の場所として「スキー場周辺」という言葉で説明したのか、「グレンデ付近」という言葉で説明したのか。両方を使って説明したのか。

(4) この時点（講師打ち合わせ）で「スキー場周辺」（または「グレンデ付近」）には樹林帯は含まれていたのか。

(5) この時点（講師打ち合わせ）で「スキー場周辺」（または「グレンデ付近」）には樹林帯の先は含まれていたのか。

(6) この時点（講師打ち合わせ）で、雪崩の起こった場所は視界不良で見えてなかったと証言している。見えてなかったということは、そこは危険であるという意味ととらえられるが、そうした認識をもっていたか。

(7) 講師打ち合わせのときに、顧問の誰かが「雪が多いから十分に気をつけよう。あまり上には行き過ぎないようにしよう。」といったと証言があるが、その発言を聞いたか、聞いたとき、何を感じたか。

5 ラッセル訓練時について、お聞きします。

(1) なぜ第2班はあのルート（左側樹林の尾根）を選択したのか。そのコースに行くように指示したのはなぜか。

(2) 樹林帯に入ったとき、積雪はどの程度であったか。視界や風の状態はどうだったか。

(3) 樹林帯に入ってから縦一列で登ったと思うが、それはなぜか。

(4) 樹林帯に入るとき何かを感じたか。生徒たちは何か言ったか。生徒たちはどのような様子であったか。

(5) その他の班も樹林帯の中に入ることは想定していたか。他の班は見えたか。

(6) 樹林帯を登っているとき、第1班が自分たちより上にいることは知っていたか。見えていたか。

(7) 第2班の選択したコースは他の班は登ってこなかった。どうしてなのか。

(8) 第3班、第4班は第1班のルートを選んでいる。どうしてなのか。

(9) 樹林帯の中を登っているとき、どのようなことを考えていたか。雪崩に遭遇する不安はなかったか。

(10) 先頭が傾斜の緩やかところに行ったときに止まるよう指示したが、それはなぜか。

(11) ラッセル訓練ではどの辺りまで登ろうと決めていたか。休むよう指示した場所までか。

(12) 待っている間に風が出てきたことで下山を決断したと証言している。風が出たことでなぜ下山の決断になったのか。風が出たことに対し、何を感じたのか。

(13) 下山を開始したのは、具体的に雪崩の危険を感じたからなのか。

(14) 下山を決断したことを他班の講師に連絡を入れようとは思わなかったのか。

(15) 下山を開始したときに、第1班と思われる隊列を確認していると証言しているがそれに間違いはないか。

6 無線通信について、お聞きします。

(1) 講習会等での無線通信ですが、普段はどのようなときに連絡し、どのような会話がなされていたのか。

(2) この春山安全登山講習会の2日目以降、渡辺前委員長はどのようなときにどのような通信をしていたか。

(3) 3日目、事故前までに、渡辺前委員長は誰とどのような通信をしたか。

(4) 渡辺前委員長は、ラッセル訓練開始の後、各班講師から活動状況などの情報を受信したか。

(5) 本件講習会では、無線通信をどのようなときにどのように使うか、講師たちに説明し、共通理解をさせたか。

7 雪崩発生後について、お聞きします。

(1) 渡辺前委員長が雪崩に巻き込まれたことは、近くにいた他の班も雪崩に巻き込まれたと推測できるが、そう考えたか。

(2) 自力で脱出した後に、菅又副委員長に無線で呼んだが応答がなかったと証言しているが、そのとき、どのようなことを想像したか。

(2) また猪瀬委員長から応答がなかったとき、どのようなことを考えたか。

(3) 第1班が無線に出ないので第1班は行動していると思ったと答えていたが、雪崩が上から来て、第1班が上方にいることを考えあわせると、第1班が無線に出ないのは雪崩に巻き込まれた可能性がある」と推測する方がより自然な判断ではないか。

(4) もし第1班が雪崩に遭遇していないのならば、雪崩を目撃している可能性が高く、第3、4班が第1班の後をついてきていることは多分分かっていたことなので、搜索に駆けつけてきているはずである。全く第1班の生徒や顧問の姿が見えないことは、雪崩に遭遇した可能性が高

いと判断できたのではないか。

(5) こうした中で（無線で呼んでも第1班の応答がない）、一人で下山ルート of 搜索を開始するが、第1班の姿が全く見えないことを考えれば、第1班が雪崩に遭遇したかどうかの確認が必要ではなかったのか。

(6) 自分の班より上にいる第1班の安否が不明の中で、第2班の生徒の雪崩の第2波を警戒し、下山を決めた判断には、多くの疑問が残る。

第1班の姿も声も確認できないのは、第1班が雪崩に巻き込まれた可能性を示している。通常は心配が先に来るのではないか。3、4班は1班の遭難を知って救助活動をしている。

(7) 第1班から第4班までのすべての生徒の安否が掌握できない状況で、さらに猪瀬委員長への無線が通じない状況で、最も経験のある渡辺前委員長が現場での指揮をとり、各講師や引率者への指示、生徒への指示を行うことが重要だと思う。渡辺前委員長自信が下山ルートを搜索することよりも、生徒全員の安否の確認と救助要請を最優先すべきであったと考える。このことについて、どのように考えたか。

現状把握の困難な状況であったとは思いますが、最悪の状況を想定した対応をとることが必要であると考えます。最悪の状況を推定すると、①人員点呼ができていない生徒や教員は雪崩に巻き込まれている可能性が高い。②第1班の姿や声が確認できていないのは雪崩に巻き込まれて応答できない可能性が高い。③第2波の雪崩が発生する可能性がある。④現在早急に救命措置を必要とする被害者がいる。などである。

生徒全員の生命をどのように守るかを第一に考えると、①安否の確認ができていない生徒や教員の把握、②できるだけ早い本部あるいは直接の救助要請、③まだ確認できていない第1班の安否の確認、④緊急措置が必要な被害者への対応、⑤第2波を避けるための下山ルートの搜索と下山が考えられる。

8 7年前の雪崩事故について、お聞きします。

(1) 渡辺前委員長は、平成22年3月27日の郭公沢最上部での雪崩事故について、どのような場所で、どのようかかわっていたのか。

その時登山専門部委員長であったと聞いている。

(2) この雪崩事故について、登山専門部の関係者において、どのようなことが伝えられ、何が共有されてきたか。

第一次報告書では、7年前の雪崩については、その後登山専門部の委員会等の関係者で事実が共有されてきたと記されている。

(3) 7年前の事故は、その場所固有の雪崩事故ではなく、春山安全登山講習会の雪山登山では、どこでも条件がそろえば起きる可能性がある雪崩事故であり、茶臼岳での雪山登山の危険性を示した事例だと解釈できる。当時委員長であった渡辺前委員長は、こうした考えは持たなかったのか。

平成22年3月の雪崩事故は、本件と同じ春山安全登山講習会での事故で、当時の第6班の講師と顧問が沢の上部のやや急な斜面を通過する訓練のためにロープを張っていた際に、顧問がルート工作のために斜面を下降しているとき、体重のかかったロープが斜面上部に食い込んだことにより発生したと証言されている。斜面の雪面に負荷がかかったことにより発生した雪崩である。開催時期、同じ茶臼岳、やや急な斜面、人が入ったことにより発生したなど、本件講習会と条件が酷似している。

(4) 7年目の雪崩事故から、安全な雪面であると思えるような斜面でも、バランスが崩れることにより、表層雪崩が起きることが、茶臼岳で大いにあり得るという教訓を導き出し、広く周知していたならば、今回のラッセル訓練への変更にも大きな影響を与えたと考える。渡辺前委員長は、7年前の事故から教訓を導き出し、それを広く伝えていくという責務が委員長としてあったと思う。このことについてどう考えるか。

(5) 登山専門部の委員長を引き継ぐときに、7年前の事故と同じような雪崩事故を起こさない、あるいは回避するために、次の委員長に事故の概要や教訓を引継ぐことが必要であったと考えている。そうした意識を持たなかったか。

口頭ではなく、やはり文章化したり図表化したりして、次の若い顧問に教訓として残すことが、登山専門部講師の心の準備や技術向上につながると思う。

9 春山安全登山講習会について、お聞きします。

(1) 春山安全登山講習会は、栃木県内の高校生にとって本当に必要な講習会であるか、検討すべきだと思うが、どう考えているか。

検討すべき理由は以下である。

- 長い歴史をもつ安全登山講習会であるが、絶対に起こしてはならない雪崩事故により8名の死亡者をだしてしまった事実は非常に重大だ。同じスタイルでの春山安全登山講習会の開催は、遺族、被害者は絶対に賛同しない。
- 雪崩に遭遇するか、回避できるかは、その危険場所に入るかどうかで分かれる。その判断は最終的に各班講師に任されていた。班の講師の判断には、雪崩に対する知識や状況理解、危機意識や安全管理が深く関わる。計画変更決定者の3名だけの問題ではなく、登山専門部全体の問題だ。同じ感覚を持つ指導者が講習会を運営することに、遺族等は納得できない。
- この講習会自体がいくつもの矛盾を抱えて継続されてきた。例えば、最も講習を必要とする1年生は参加していない、春山や夏山より講習会の方が積雪が多くより危険性が高い、雪山登山講習で夏山安全登山を学ぶ、生徒と経験の浅い顧問がともに受講者、積雪期の安全登山で何を学ぶのかが不明瞭などがあげられる。
- 多くの学校の生徒を集めて行う良さは、初日の全体講義以外あまりない。第2日目以降は学校別の活動である。実技指導は各学校の実情によって違っている。第2日目以降は各学校が単独で行っても同じ成果があげられるだろう。
- 多くの学校の生徒と顧問が集まって実施するためマイナス面が出てくる。一つは責任者が曖昧になることだ。今回も高体連会長や登山専門部長が責任者であるが、直接的にはかかわら

ない。各校が主催者になれば、校長が責任者になり、安全管理や危機管理がより徹底される。二つ目は、今回のように生徒と講師が別学校という班編成ができてしまい、生徒との信頼関係ができないまま指導するマイナス面が大きい。

(2) 高校生の雪山登山は原則中止すべきだと思うが、どう考えるか。

7年前にも同じこの春山安全登山講習会で人為的な要因である雪崩事故を起こし、教員と生徒が被害にあった。そのことが広く県内山岳部顧問や登山専門部に教訓としては残されず、また今回も同じように人為的な誘発で発生した可能性のある表層雪崩を回避できず、8名の若い命が失われた。この事実が生徒や保護者に与えた影響は計り知れない。

また、文部科学省では以前から冬山登山で「原則高校生の冬山登山は禁止」の通知を出しているにも関わらず、県内ではいくつかの学校が雪山合宿と称して冬の登山を実施し、更に本件の講習会で雪山登山を実施している。講習会という名目で実施し、必要な基本的手続き等も省略し、装備や準備も十分に整っていない状況で、未熟な高校生を雪山につれていっている。

こうした登山専門部の軽薄な判断と行動は、生徒の命の重みや雪山で生徒の命を守ることがいかに難しいことであるかを忘れたような思考と行動である。

基本的な安全確認や危機管理といったことを自分たちの経験則だけに頼って講習会を運営し、生徒を指導してきた雪山登山は、原則中止すべきである。

10 登山専門部は何度でも自分たちの判断と行動について何が足りなかったのかを検証しなければならない。このことについてどう考えるか。

特に、今回の事故に至る第3日目の朝のラッセル訓練へと決まっていく流れをもう一度見直し、どこに問題点があるのか、何が足りなかったのか、どのような知識が必要であったのか、何がそうさせたのかなど、再度問題点を明らかにすることが、類似の雪山登山における事故防止には欠かせない。

高体連や登山専門部は、検証委員会にだけ任せないで、今回の雪崩事故を生み出している背景と要因を調査検証しなければならない。問題は指導者の知識や技術だけでなく、その判断と認識や意識の問題であると内省し、指導者の集まりである組織の体質や危機管理能力についても調査分析を行い、真剣な検討と徹底的な改善を図らなければならない。それができなければ、また同じような判断と認識による事故を起こしてしまう

11 最後に

(1) 今回の雪崩事故について、現時点での渡辺前委員長の見解をお聞きます。

ア 雪崩事故はどうして起きてしまったのか。

イ 何が足りなかったのか。

ウ どうすれば回避できたのか。

(2) 渡辺前委員長は、今後も高等学校で山岳部顧問として指導するつもりか。